

A decorative border with a repeating floral and scrollwork pattern surrounds the text.

好色一代女

村田 穆 校注

新潮社版

新潮日本古典集成 (第三回)

好色一代女
こうしよくいちだいおんな



定価 二二〇〇円

昭和五十一年八月五日 印刷
昭和五十一年八月十日 発行

校注者 村田 穆 むらた たけし

発行者 佐藤 亮 一

印刷所 大日本印刷株式会社

発行者 株式会社 新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一
電話 東京03(二六六)五一一一(業務)
東京03(二六六)五四一一(編集)
振替 東京 四一八〇八

装画 佐多 芳郎
組版 シーティエス大日本
製本 新宿加藤製本

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

凡例 五

卷一 三

目録 一五

老女の隠れ家 一七

舞曲の遊興 三三

国主の艶妾 六六

淫婦の美形 三五

卷二 四七

目録 四九

淫婦中位 五二

分里の数女 五八

世間寺大黒……………六

諸礼女祐筆……………七

卷 三……………七

目 録……………八

町人腰元……………八

妖孽の寛濶女……………九

調謔の歌船……………九

金紙の七元結……………一〇

卷 四……………一

目 録……………一

身代りの長枕……………一

墨絵の浮気袖……………一

屋敷塚さの渋り皮……………一

栄耀願ひ男……………一三三

卷 五……………一三九

目 録……………一四二

石垣の恋崩れ……………一四三

小歌の伝受女……………一四九

美扇の恋風……………一五〇

濡れの間屋硯……………一六〇

卷 六……………一六七

目 録……………一六九

暗女は昼の化物……………一七一

旅泊の人詐……………一七七

夜発の付け声……………一八三

皆思はくの五百羅漢……………一九三

解 説 一九九

付 録

西 鶴 略 年 譜 二二三

近世の時刻制度 二〇三

近世の貨幣をめぐる常識 三三四

凡 例

一、本文の作製については、本文を読みやすい形で提供するために、原文の理解に特別の支障をきたさない限り、近世の特殊な表記を避けて、現代の読者に親しみやすい一般的な表記にとめた。

一、右の立場から、異体の、あるいは、特殊の漢字は現代通用の漢字に改め、一部は仮名に改めたところもある。また、適宜仮名に漢字を当てた。ただし、それらの用字法は必ずしも統一しなかった。たとえば、「あはれむ」を、原文では、「あはれむ」「哀れむ」「憐む」と書き分け、「脇指」「脇差」と混用するが、それは、文中の漢字と仮名の均衡とか、字面の感じによるので、強いて統一しなかった。

特殊の文字ながら原形を残したのは、次のごときわずかの例にすぎない。

「徳」(「得」の意)・「大臣」(「大尽」の意)のごとき表記には、町人の意識がはっきり出ているので、原形を残した。

「店」の意で「みせ」と「たな」を読み分ける時は、当用漢字の表記では「店」「たな」と書くが、この本では、原文の「見世」と「棚」の表記に従った。

「咄」(話)・「湊」(港)・「大坂」(大阪)・「花麗」(華麗)・「物じて」(総じて)などは、現代の読者にも読めぬ文字ではないので、原形を残した。

一、熟合・転成の名詞については、現代の送り仮名法を原則としながら、読み方の難易に応じて、語尾の仮名を残したり、削ったりして、必ずしも統一しなかった。

一、本文の仮名づかいと振り仮名は歴史的仮名づかいに、頭注と傍注は現代仮名づかいに従った。

本文の振り仮名は、一部は作者（西鶴）の指定したものもあるかもしれないが、多くは出版者が読者の便を考えて記したものである。従って、原文に必ずしも忠実に従わなくてもよいと考えて、自由に取捨した。例えば、「標り行く」の「標り」に、「たどり」と「たより」の両様の振り仮名があるが、「たどり」に統一した。原文に「青山せいざん変つて白雪しらゆきの埋うづむ時」とある場合の「せいざん」「しらゆき」と、音と訓で表記してあるのは、意図的に読み分けられたものではなく、音訓いづれで読んでもよいものと考えて、振り仮名は削った。また、「商人」の振り仮名は、「商人」とある。西鶴の読例では、「商人あきんど」「商人あきんど」「商人あきんど」があり、「商人」としたのは、ここでは「しようにん」とか「ばいにん」とか音読しないための指定なので、それを一つの読み方に固定するのは、読みの範囲を狭めることになって、好ましくはないが、この本の性質上、かりに「商人」と振った。もともと読む文学は、語る文学とは性質を異にするところがあり、読み方よりは文字面を重んじる一面のあることを御承知願いたい。

一、句読点は、原文に付けてある場合と、ない場合がある。或る場合は、西鶴の特殊の文体を示すところもなくはないが、かなり無造作なところもあるので、意味本位の読みやすい形の句読点に統一した。

清濁についても、当時は濁点・半濁点は加えられないことも多いので、はっきりしないところも

あるが、一応私の読み解いた形で、清濁をつけた。清濁は、発音の難易に従って移るところが多いので、あまりこだわる必要はないかと思う。

繰返し記号は、原文には、「ム」「ミ」「ク」などが用いられているが、漢字を二字重ねる場合に「々」を用いる外は、すべて同字を重ねた。

誤字・脱字の明らかなもの若干は訂正し、多く頭注で断った。

一、段落は原文にはないが、翻刻・注釈の書の多くの先例にならって、段落をつけ、本文理解の便を計った。

会話の部分には「」をつけたが、まま、心中の思いにも「」をつけた。その方が理解に便利と考えた場合である。

挿絵は全部収めた。本文の理解を助ける点が多いからである。なお、この挿絵は東京都立中央図書館所蔵本を参照させて頂いた。

一、注釈は、頭注と傍注（色刷り）による。頭注には、語句の説明、傍注には、現代語訳という原則だが、余白の関係と、説明を加える必要上、現代語訳的なものを頭注にまわした場合も少なくない。また、頭注の余白に適宜小見出し（色刷り）を加えた。

注釈の目標は、本集成の趣旨にそって、この作品を原文で読んで、日本の近代文学や外国文学の翻訳を読む程度に、文学として理解できるということである。ただ、頭注は見開きを越えて他の頁にわたらないというきまりなので、いささか無理をしたところもある。

語釈は、従来の研究を勘案して、なるべく簡略にした。出所を一々断るだけの余白はなかった

が、主な出所は後に付す諸注釈書である。詳細な注解を必要とする向きは、それらに就かれない。ただ、従来の注解では、私に理解し難かったところや不備の感じられるところもないわけではなく、そのような箇所は補注でも加えたいところなので、いささか均衡を失して長くなった。時制・染色・織物・料理・計器・経済・制度・地理・鉱業などの方面に多く、それぞれの専門家・実務家のお教えをうけたところも多い。

特に地名については、現在の読者の便を考えて、わかりきった国名の一部（たとえば、武蔵・摂津など）の外は、現在の地名に統一して注記した。もっとも、地名は絶えず動いているので、若干の例外を除いて、昭和四十七、八年ころのものと御了解願いたい。ただ、地形の変化や度重なる呼称の変更から、新旧の地名は必ずしも重ならないので、その一端を記すにとどめたところがある。東京都にこの例が多い。が、大体のところは察知できるところと思う。地名については、市区町村役所・教育委員会・公私の図書館・その他、既知未知の方々の御援助を受けたところが多い。

なお、私の特に力を注いだところは、従来の語釈中心の諸注とは違って、解説的注記を多くした点である。専門外の人たちに近世文学を理解してもらうために必要なことは、語釈の詳注ではなくて、社会・制度・経済・風俗など近世常識の解説であると思つたからである。

また、西鶴の語法は、特殊なところがあるので、頭注に余白の許す限り、注記するにつとめた。

また、近世の経済事情は、現代とは著しく異なるので、はじめは当代通貨の現行価格への換算をすべて頭注や傍注に記入しようかと考えたが、近ごろの貨幣価値の変動はあまりにはげしいので、とりやめて、付録に「近世の貨幣をめぐる常識」を入れた。御参照願えれば幸いである。

また、作品の内容について、在来の学界の正統派とは違った私見を、頭注のところどころに、かなり大胆に書き加えた。異端の説が読者の思索を刺激することを願ったことである。

解説や付録も、右の観点から書いた。

一、この本をまとめるにあたって、参照した注釈書や語彙研究や論文は甚だ多いが、この本の足りないところを読者に補ってもらうために、割に手に入り易くもあり、かつ、重要な注釈書として、次の諸著をあけておきたい。

◇三田村鳶魚編『西鶴輪講 好色一代女』昭和三年～四年 春陽堂刊（後、昭和三十五年 青蛙房重刊）。

◇藤井乙男校注『好色一代女』（『西鶴名作集』所収）昭和十年 講談社刊。

◇暉峻康隆校注『好色一代女』（『定本西鶴全集第二巻』所収）昭和二十四年 中央公論社刊。

◇麻生磯次校注『好色一代女』（『日本古典文学大系』西鶴集 上』所収）昭和三十二年 岩波書店刊。

◇横山重校訂『好色一代女』昭和三十五年刊 岩波文庫。

一、私は初めて注釈らしい試みをして、思いの外に多くの方々のお力添えを必要とするのに驚いた。注釈という仕事は、国文学者の長い地道な研究の集積の結果を示すものなので、それがこの注釈の基根をなしていることは、言うまでもないが、研究史の浅く雑学にわたることの多い近世文学では、専門外の方々のお力添えを得ねばならぬところが、それに劣らず多かった。簡略な注釈という性質上、斯学内外のお教え頂いたすべての方々の芳名を注記に逸したことについて、改めて御寛恕を乞い、あわせて、心から御礼申し上げます。

なお、疎懶の私のこの書をものし得たのは、直接には、野間光辰先生の御推挙、谷田昌平氏の口説き上手、山本澄子君の助力によるところである。心から御礼申し上げたい。

昭和五十一年七月

好色一代女

入 絵

好
色
一
代
女

一

一 美女。

二 本来は、奇異の人の住む別天地の意。『西鶴諸国はなし』巻二の五の「隠れ里」はその意。ここでは、世間離れて隠れ住む里の意だが、本文には原意の雰囲気をとどめようとした。その気持は、巻一の一に『遊仙窟』の訓読法の目立つあたりにもうかがえよう。

三 世間に住んでいたころの、その女の物語。

四 聞けば聞く程、興味深い。

五 都とは、こんなところ。桜咲くころの東山の見聞。

六 こんなものは外の地にはいない。

七 千人の中にも、類のない美人には。

八 支度金。雇用の契約が成立した際に、契約金以外に特別に与えられる金。手付金や内金とは異なる。

九 付録「近世の貨幣をめぐる常識」参照。

一〇 今、京都市下京区西新屋敷の遊里。寛永十八年（一六四一）六条三筋町（室町通六条）より移転。この遊女を見た目からは、紅葉や月はもとより、地女（素人女）などは問題にならぬ、との意。このところ、「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ」（『新古今集』藤原定家）のもじり。速吟俳諧に長じた西鶴には、耳なれた古典が、文飾として流れ出ることが多い。

* この頁は、表紙に張り付けてある副題籤で、巻一の内容を示唆するものである。初めの三行が第一話、次の三行が第二話、次の三行が第三話、終りの三行が第四話を示す。以下各巻同様である。

巻一

姿の隠れ里に訪ね入り

世に有る程の女物語

聞けば聞く程

都とは桜咲く東山の事

何処にも女は あれど

こんなものは

千人の中にも

ないといふは捨て金

二百両

島原見た目に

外の紅葉も月も

地女も